



ちょっとそこまで～お散歩日和(地域編)～



# 愛染院 (その1)



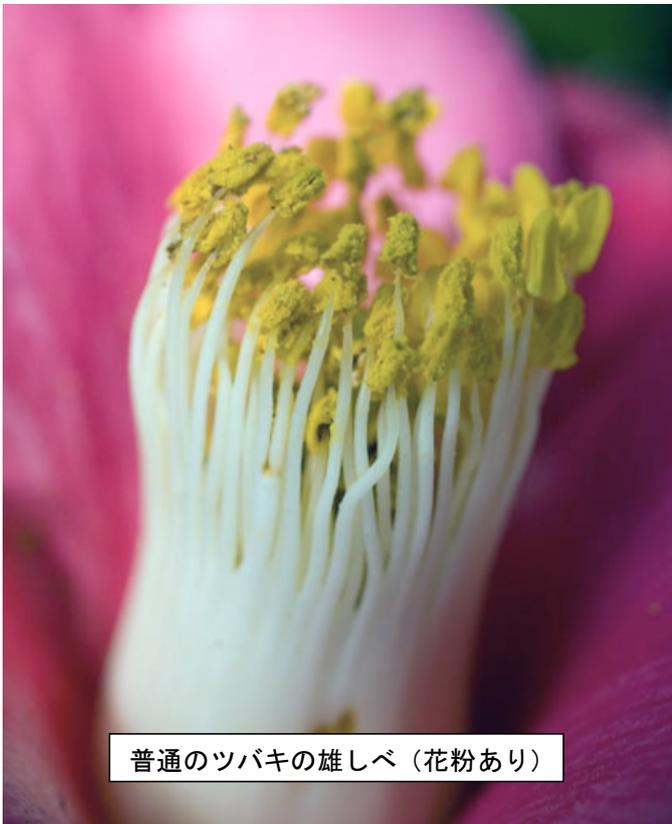
♪桜 れんぎょう 藤の花 芙蓉 睡蓮 夾竹桃  
野菊 りんどう 金木犀 桔梗 侘助 寒牡丹  
あの人を 悼むように 咲き匂う めぐる季節の花々



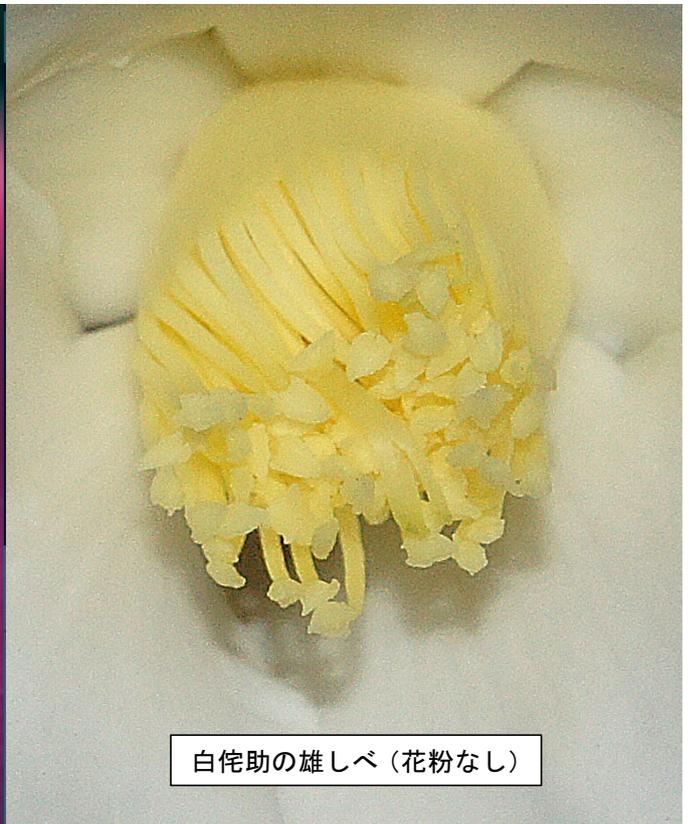
都はるみが歌う「散華」の冒頭です。改めてこの詞を読み直して違和感を覚える人もいるのではないのでしょうか。誰もが知っている花の名前がずらり連なる中、冬の花に「侘助」が出てくるからです。「侘助って何？」と思うのが普通です。

この花はツバキの1品種です。したがって、歌にするに当たってツバキでもサザンカでもよかったのに、どうしてわざわざこんな誰も知らないような品種名を持ち出したのか意味不明です。ただ、昔から、ほんのちょっとの違和感を盛り込むと人の心に残るという常道があるので、それに従ってのことだと推察します。

この品種の最大の特徴は、おしべの先端の花粉を作る器官が退化して花粉を作らないことです。当然ながら結実し種子を作り出す能力はありません。不稔性です。したがって、増やしたいときは、一般的なツバキでする実生ではなく、挿し木になります。その他、ツバキより花の大きさが1回り小さめで、一重咲きで猪口咲き(半開き)のものが多いこと、開花時期が少し早いことなども特徴です。



普通のツバキの雄しべ(花粉あり)



白侘助の雄しべ(花粉なし)

愉快なのはその名前です。由来には諸説あって、それぞれがもってもらしくて楽しめます。まずは、千利休に仕えてこの花木を育てた庭師を侘助と言い、彼の名前に因んだという説。茶室に飾る茶花として重用され「侘び」と「好き」がなまって「侘助」になったという説。

そして、秀吉による朝鮮出兵の際に、笠原侘助と言う人物が持ち帰ったという説です。

一般的にはピンク系が多いのですが、その中で白花は珍しいので「白侘助」と呼んで珍重されています。ワジサビの世界観とマッチするからなのでしょう。

今回紹介するのは、その「白侘助」です。と言っても「植物編」としてではなく、あくまでもその花が見られる場所をご紹介したくて取り上げました。じつは、侘助の名所と言って真っ先に思い浮かぶのが京都金閣寺ですので、ほんの少しでもその気分をお近くで味わっていたらという趣旨です。

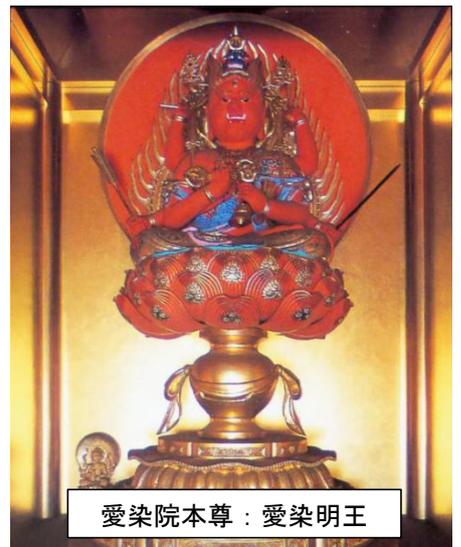


その地が練馬春日町駅前の「愛染院」です。「愛染」と聞いて、即「愛染カツラ」を思い出すのは相当な年配者ということになります。川口松太郎が書いて大ヒットした戦前の作品で、後に映画化され、上原謙（加山雄三のお父さん）と田中絹代が、それぞれ大病院の跡取り医師と、子連れ未亡人看護師を演じる、すれ違い恋愛ドラマです。

私自身は学生時代の宴会芸で、次のフレーズを当て振りしながら歌うのが持ちネタでした。

♪花も嵐も踏み越えて／行くが男の生きる道／泣いてくれるなほろほろ鳥よ／月の比叡を独り行く

話を愛染院に戻します。正式名称は「練月山観音寺」と言います。しかし、ご本尊は観音様ではなく愛染明王で、ちょっと変則的寺院ということになります。気になって調べたのですが、秘仏らしく、なかなかそのお姿を確認できませんでした。春日町図書館で、貸出不可の「練月山愛染院誌」（橋谷田千代美著）を見つけてやっと写真に収めることができました。木造彩色。像の高さは86cm。太陽を表す円形の光背があるとの記述が添えられています。



ところで、仏像を見て、これは如来像だ、菩薩像だと言い当てることができる人はそうはいないはずですが、しかし、手の形と持ち物によっておおまかな約束事があり、それが分かるようになると観賞するにも楽しさや面白さが加わってくるはずですが。

ということで、今回は愛染明王の基本形に触れておきます。



一般的に三つ目を付けた一面で、髪は怒髪、そして6本の手を持ち、全身を朱色に染めた忿怒（ふんぬ）形に造られます。頭上には獅子の首を表す冠を置き、前部第1手に五鈷鈴と五鈷杵（ごかれい・ごかしょ：修業時に使う用具）、第2手に弓と矢、第3手に蓮華と、もう一方には、祈禱の目的によってその都度持ち物を変えるために何も持たせていません。

気になるのは第2手の弓矢です。戦いのためとも思えるし、西洋のキューピッドよろしく愛の成就を願うためとも解釈できます。

ここで、そもそも明王とは何なのかという話をしたいと思います。真言宗における最高仏は大日如来です。その命を受け、仏教に従



わない者を正しい道に導いたり、仏教を批判する者と戦ったりする役割を担っているのが明王です。そのため、忿怒の表情で私たちを睨みつけています。

この明王像で最も有名なのは、京都東寺の講堂にある立体曼荼羅の国宝群でしょう。大日如来に向かって右側が五菩薩、左側が五大明王です。中で一番人気は不動明王ということになります。しかし、残念ながらその五大明王に愛染明王は含まれません。大いに信仰が広まっていくのは平安後期以降です。

蛇足までに触れておきますが、私の出身地広島県福山市にある明王院五重塔（国宝）は1348年の建立で、初層に大日如来を本尊として左右に不動明王と愛染明王を祀っています。この時代になってやっとマイナーな存在を脱却したことが伺えます。



愛染明王が庶民信仰に広まっていった最大の理由は愛欲を否定しないことだと思います。仏教における戒律では煩惱と愛欲をかりそめの快樂として否定しますが、「人間の本能であり否定することはできない。むしろこの本能を向上させ、仏を信心するエネルギーに昇華させるべきだ。」とする、少々手前勝手な解釈をしています。

そのため、江戸時代は花街の守護神として信仰されたそうですし、吉原近くの松乳山聖天の愛染聖天信仰などはその流れになるのだろうと思います。他にも「愛染」＝「藍に染める」という言葉から、染物・織物職人や現在ではアパレル関係者からの信仰もあるそうですが、本当かどうかは不明です。



また、これも有名な話ですが、戦国時代の武将である直江兼続が「軍神」としての愛宕権現や愛染明王を信仰し、自らの兜に「愛」の文字をあしらったという説もあります。上杉謙信の毘沙門天信仰は有名な話ですし、その家来である直江兼続が影響を受けたとしても不思議はありません。大いに耳を貸す価値はあるように思います。

ちなみに、大河ドラマでその昔、妻夫木聡が演じた直江兼続は、あまりにも現代風に脚色し過ぎだったように思いました。あんなに柔和でユーモアに満ちた男とはとても思えません。私の印象は剛直にして伶俐です。それに、そもそもこの時代、彼にとって「愛＝LOVE」ではなかったはずです。



回り道が過ぎました。「白侘助」がこれから花盛りになるのでぜひ見に行ってみてください。練馬の名木にも選ばれています。（次号に続く。）

